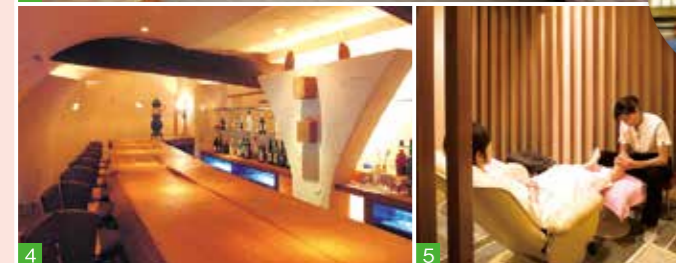


もっと気軽に「鶴雅」。
あなたらしい愉しみ方で
阿寒の温泉ステイを。

美しい四季の移ろいを映し出すガラス張りのロビー。
非日常への旅がここから始まります。



- ①道産食材を取り入れた「旅先での食」が楽しめる花ビュッフェ「ハーモニー」。
- ②お肌にやさしい、やわらかな泉質に安らぐ源泉かけながしの湯「花しづか」。
- ③華やぎと安らぎの一日を演出してくれるデラックスツイン。
- ④隠れ家のような穏やかな雰囲気嬉しいカクテルバー「フォレストケープ」。
- ⑤旅の疲れをじんわり優しく癒してくれるフットマッサージを、どうぞ。



気取らず、気ままに。
阿寒のレイクビューに抱かれた
潤いの休日を、ゆったりと。

かがり火が温もりある幻想的な雰囲気醸し出す
ゲストラウンジ「アベソ」

その日の夜、インターネットで鶴雅を調べた。自分には敷居が高い宿などと思っただけれど、思いの外、手が届く宿もある。気づけば「予約」ボタンを押していた。あとは色々と用意して…。

「まだ着かないの？」

少し彼女が痺れを切らしてきた。

「もうすぐ着くよ。ほら、見えてきた」と顎で行き先を指し示した。

「鶴雅じゃん。またまたあ…」彼女の目は案の定、疑っている。

車が鶴雅の駐車場に入って、ようやく彼女は信じてくれた。

「えっ？ 本当に鶴雅に泊まっちゃうの？ すごーい！」

それから彼女は終始、感動の面持ちで宿を堪能していた。掛け流しの温泉、ちょっとした奮発してエステも予約しておいた。そして、「太っちゃうよ」と言いながら、いつも以上の笑顔で食事を愉しんだ。

部屋に戻ると、予めフロントに頼んでおいたワインがセッティングされていた。グラスに注ぎ、彼女に手渡す。そして、チンと軽やかな音を奏でて乾杯。

「至れり尽くせりだね。一生忘れられないクリスマスかも…本当、ありがとう」

彼女は、少し頬を染めて微笑んだ。

「それだけじゃないよ。きつと今日が二人の記念日になるんだから」

そういつて僕は、袂から小さな箱を取り出した。

「一度、鶴雅の温泉に行ってみたいな」

彼女の呟きを聞いたのは、夏を過ぎた頃。付き合ってから三年。意識はしていないけれど、このまま結婚するのかな…と感じ始めていた。男としては、ちゃんとケジメをつけたい。でも、タイミングが難しい。そうしているうちに秋を迎え、樹々の葉はすっかり落ちていた。

彼女は、能天気な「今年のクリスマスは、ホテルのディナーにしようか、ゆつくり家で過ごそうか。どっちがいい？」と聞いてくる。さて、どうしたものか。

そこで呟きを思い出した。

「良かったねえ。休みが取れて」

助手席で彼女が笑う。僕もつられて笑みを浮かべた。

一ヶ月前から計画していた(ちょっと早い)クリスマス旅行。この日のために、年末で多忙を極める職場に無理を言いつて休みをもらった。上司には、この計画の本意を伝えてあったので励まし半分、冷やかし半分で送り出された。そう、今回の旅行には、彼女に伝えていない秘密がある。だから、車内で彼女は何度も聞いていた。

「いったい今日は、どこに行くの？」と。

鶴雅物語

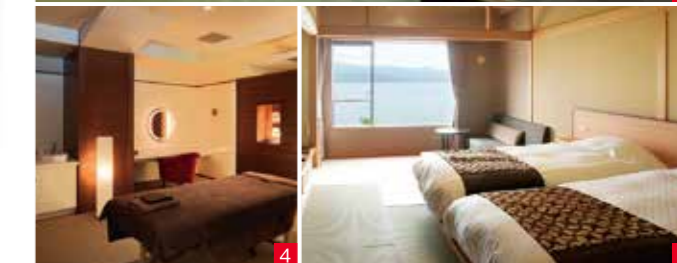
二人の未来へと続く旅



〒085-0467
釧路市阿寒町阿寒湖温泉1丁目6番1
TEL.0154-67-2500
FAX.0154-67-2330



〒085-0467
釧路市阿寒町阿寒湖温泉4丁目6番10号
TEL.0154-67-4000
FAX.0154-67-2754



- ①雄大な自然を間近に、語らいのひとときに酔いしれるバー空間。
- ②安全な食材を使って素材本来の味を引き出した北海道ビュッフェ「HAPO」。
- ③シルキーバスや立ち湯など、心身ともに寛ぎが楽しめる女性大浴場「マツネシリ」。
- ④オールハンドケアでもてなすトリートメントサロン「フレブ」。
- ⑤阿寒湖を一望しながらゆったりとお寛ぎいただける湖側「和ツイン」。